

<特集記事> 我が社の独自性を支える「経営の掛け算」 -後編-

◆ ㈱名取製作所の独自性を支える3つの「経営の掛け算」

前号のWAVEでは、当組合の組合内経営大学（〔自己覚知〕経営研究会）に参加する㈱名取製作所（埼玉県久喜市：自動車のワイパーアームの設計・加工・製作）の企業概要について掲載しました。後編となる今号では、同社の独自性を支える3つの「経営の掛け算」を解説します。

◆ <掛け算①> ニッチな市場で「伸ばす」「曲げる」技術を活かす

同社のワイパーアームは、やや太めのワイヤーをグルグルのコルク状になっている硬鋼材を真っすぐに伸ばす工程から始まります。ワイパーアームの耐久性・耐摩耗性を維持するには太くて硬い鋼材が必要で、その硬鋼材を真っすぐ伸ばす工程では、同社独自の技術が生かされています。



自動車は3万点もの部品から組み立てられると言われますが、寸分の曲がりであっても故障・事故に繋がってしまうため、この工程は同社のコア技術のひとつとなっています。

真っすぐに伸ばされた硬鋼材は、一定の長さに裁断され、プレス加工を経て、ワイパーアームの形状に曲げる加工が施されます。

数ある自動車部品の中でもワイパーアームの加工に特化し、40年超の長きに亘り、コツコツと培ってきたコア技術が「見えない参入障壁」を創っています。現在、同社のワイパーアームは年産1000万本で、1台の自動車に2本使用すると仮定し、500万台分の自動車生産に貢献する計算になります。

◆ <掛け算②> 社会貢献とビジネスを両立させ、従業員の意欲を湧出する

同社は、陸上競技に挑戦し続けている山本篤選手が使用する「競技用義足」の開発・提供に携わっています。2016年リオデジャネイロパラリンピックで山本選手は、走り幅跳びで「銀メダル」を、400Mリレーで「銅メダル」を獲得しました。

同社は、陸上競技に挑戦し続けている山本篤選手が使用する「競技用義足」の開発・提供に携わっています。2016年リオデジャネイロパラリンピックで山本選手は、走り幅跳びで「銀メダル」を、400Mリレーで「銅メダル」を獲得しました。

そもそも同社が競技用義足の開発に携わるに至ったのは、名取社長が障がい者スポーツに触れ、感動し、『選手が装着しているスポーツ用義足に当社の技術が生かせるのではないかと』と従業員に提案したこと、端を発しています。開発を開始した2011年から6年の歳月を経て、その間、試行錯誤を繰り返しながら、現在の義足に辿り着きました。

同社の技術がオリンピックのメダリストの記録更新・メダル獲得に貢献するというPR効果は勿論ですが、製造現場の従業員にとってのモチベーションアップに大きな寄与をしている点を強調したいと思います。

それは「自分の作業工程を経て生まれた製品が誰かの役に立っている」ことを山本選手のメダル獲得を通じて、実感することができるからです。

通常、製造現場で作業をする従業員は、自身が目の前で加工する部品の最終形に触れることはありませんし、ましてその消費者の声を聴くこともありません。しかし、名取製作所では、例え「伸ばす」「曲げる」のひとつの工程しか接していない従業員であっても、その部品の最終形が見え、遠く離れた場所でその部品が役立つ姿（自身の仕事の貢献度）を視ることが出来ます。

こうして、同社では、社会貢献活動（=障がい者スポーツの活性化）とビジネス（=同社の認知度向上と現場の従業員のモチベーションアップ）を両立しています。



➡ 次頁に続きます ➡

<特集記事> 我が社の独自性を支える「経営の掛け算」 -後編-

◆ <掛け算③> 中小企業施策を最大限に活用し、技術を磨き、経営を伸ばす

同社の6年に及ぶ競技用義足の開発プロセスは決して平たんではなく、試行錯誤の連続でした。それは、義足を提供した山本選手のパフォーマンスの特長にありました。山本選手は走り幅跳びで踏み切りの時のパワーがとても強く、通常の加工方法では義足が壊れてしまったからでした。そこで、同社単体では競技用義足の開発に限界を感じ、国の研究機関（産業技術総合研究所：以下、産総研）との共同開発を開始しました。

産総研は、国内最大の公的研究機関として産業・社会に役立つ技術の創出とその実用化、事業化のための橋渡し機能が役割です。

そして、同社が大変な苦勞をした「壊れない競技用義足づくりの壁」の突破に向け、産総研が山本選手のパフォーマンスを詳細に研究したところ、地面を蹴る力が平均的な日本人の義足アスリートの約1.5倍もあり、義足を曲げる力に至っては約2.0倍と非常に高い数字となりました。それだけの強度が山本選手競技用義足には必要であったのです。

その後、競技用義足の開発には「壊れない強度」だけでなく、「速さを追求する軽さ」という二律背反のテーマ（壁）が現れます。強度を追求するとそれに伴い、重さも比例してしまうため、産総研と協働で最適な素材探しをすることになりました。結果、チタンが選ばれますが、幸いなことに名取製作所はチタン加工に強みがあり、競技用義足の開発が一気に進むことになりました。

また、同社では、中小企業施策「ものづくり補助金」を活用し、義足の設計開発時に使用する解析ソフトを導入し、同社単体で設計・製造ができる体制を構築することができました。

こうして、名取製作所では、独自性を活かし、伸ばすために自社のコア技術<掛け算①>を活かし、社会貢献とビジネスを両立<掛け算②>するために、国の中小企業施策を積極活用<掛け算③>してきたのです。

<最後に>

〔自己覚知〕経営研究会の終了後、名取社長からは、

『 製造業、ものづくり、それも硬い素材を扱い、硬い製品を創っているため、自分の頭も固くなってしまっている。それがこの研究会で異業種の経営者が集い、柔軟かい発想で意見を言ってもらえるので、新たなアイデアの芽を見出すことができた 』

とのコメントがありました。



なお、掲載の企業情報については、各社HPを参照下さい。

◆リタネッツ事業協同組合（組合内経営大学・RU / 補助金情報）

HP (<http://www.ritanets.com/>)

◆名取製作所 HP (<http://www.natori-mnf.co.jp/>)

今後もリタネッツ事業協同組合では、中小企業経営者が自社の経営を伸ばしていくために、「一旦立ち止まる機会」と、「考えるためのヒント」を提供する「場」として〔自己覚知〕経営研究会を開催して参ります。

平成30年は、6月ごろから第3期生を募集し、〔自己覚知〕経営研究会を開催予定です。〔自己覚知〕経営研究会の概要、過去開催分（第1期生・第2期生）は、リタネッツ事業協同組合ホームページにてご確認下さい。